様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００１９０

研究課題名（和文）江戸時代の東北画家における地域と階層に由来するアイデンティティの基礎的調査研究

研究課題名（英文）Fundamental Research on Identity Derived from Region and Class among Tohoku Painters in the Edo Period

研究代表者
杉本　欣久（SUGIMOTO, YOSHIHISA）

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：８０４６３４４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代の東北諸藩に所属した画家を取り上げ、人となりや活動を記した基礎資料を収集し、「出身地域」と「身分階層」の環境要因によって育まれた感性や嗜好がどのように作画活動に影響したのかを調査した。おおむね絵画制作を本業として一定の扶持や所領を拝領して大名家に仕えた「御用絵師」、藩に所属して俸禄を賜いながら職務を遂行し、一方で余技として絵筆をふるった「武士」、さらに藩領の城下町や宿場町で生まれて画家となった「町人絵師」の３つに大別でき、後者ほど活動領域における自由度が高く、所属流派や絵画表現を左右する大きな要因となったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
取り上げた34名の画家の多くは東北の地方史で知られていたものの、実際は江戸や京都などとも深い結びつきを有し、ローカルに終始するものではないことを明らかにした。また、江戸時代の絵画史が多様性を有するものであったと示すため、画家の伝記や作画活動を伝える文献資料を『東北画人基礎資料集』という成果物に集約した。これを美術史研究者、大学図書館、東北地方の主な図書館に配布する一方、「東北の画人たち」と銘打った美術展覧会を2022年と2023年の２度にわたり、松島の古刹・瑞巌寺の宝物館で開催する。この両者により、東北の画家に対する美術史研究の活性化、さらに各地域の文化財に対する認識の深まりが期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on painters who belonged to Tohoku clans in the Edo period and collects basic data describing their personalities and activities, and investigates how the environmental factors of "region of origin" and "status hierarchy" influenced their painting activities. The three main groups of painters were: the "imperial painters" who served feudal lords with a certain amount of support and a certain amount of land as their main occupation; the " samurai" who belonged to a clan and received a stipend while performing their duties, and who used their paintbrushes as an extra skill; and the "merchant painters" who were born in castle towns or lodging towns under the domain of their clan and became painters. The latter group had a greater degree of freedom in their activities, which was a major factor in influencing the school of painting they belonged to and the expression of their paintings.

研究分野：日本美術史

キーワード：東北地方の画家　江戸時代の画家　御用絵師　町人絵師　武士の絵画

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

江戸時代に活躍した東北の画家たちにおいて、出身地域や身分階層によって育まれた感性や嗜好などのアイデンティティが、いったいどのようなかたちで作画活動に反映しているのか？これが本研究における根本的な問いであった。

研究代表者は江戸時代の絵画史を専門とするが、京都に生まれ育ち、関西の博物館施設に 20 年間勤務していた関係から、研究対象は主として京都周辺で活躍した画家たちであった。近年はそれとの比較から、江戸で活躍した画家に対象を広げ、文化的背景や環境を踏まえた論考を発表してきた。そこで明らかになったのは、京都や江戸で活動した画家であっても、出身は東北や越後、四国や九州の者が少なからずあったという事実である。若かりし日に地方から京都や江戸へ出て修養し、その後は地元へ戻り、習得した技術を生かしつつ人生を送ったのである。その遊学期間中、彼らは画を学ぶのみにとどまらず、そこに集った文化人たちと交流を持ち、地元にはない最先端の教養をも習得した。けれども、彼らがみな同じ色に染まり、地元に戻っても京都や江戸で流行する絵画と同様の作品を描き続けたわけではなかった。地方で生まれ育った環境のなかで独自の感性や嗜好を獲得し、京都や江戸で学ぶ過程においてもそれに応じて取捨選択が働いたのに加え、戻った地元にあってはそのニーズにあわせ、習得した画風を変容させることもあったからである。それゆえ、先の問いに答えるには、何よりも他地域との比較検討が必要であり、一方でそれぞれの環境で育まれた感性や嗜好を知るため、その人と為りを理解し得る多くの伝記資料を分析、検証しなければならない。

これまでの研究を通じ、画家に関する基礎資料の集成は田能村竹田や渡辺崋山など極めて著名な人物を除いては作成されておらず、散在する資料を個々の研究者が集めなければならない状況に不便を感じていた。もちろん、自ら原典資料にあたる必要があるのは言うまでもないが、まずは関係する資料がどれくらい存在するのかを把握するため、入り口となる集成が存在していたなら、個々の研究者が博捜する労力や時間を別の研究に振り分けることができると思い至った。つまり、研究者の興味関心に従い、その集成に掲載された資料を様々な観点から切り取ることにより、発展的研究に着手するのが容易となるわけである。まさに研究代表者にとって、東北画家における地域と階層に由来するアイデンティティの解明というテーマこそ、この「伝記資料集成」を作成して遂行しうる発展的研究と位置づけることができる。

研究代表者はこの調査を網羅的に全国規模で行い、最終的には全国の画家に関する「伝記資料集成」に加え、その確かな資料に基づいた「画家略伝」を作成したいという希望を抱いているが、それは膨大な時間と労力を要する継続的、長期的な研究課題であり、一朝一夕に成し遂げられるわけではない。そこでまずは東北大学に所属を移したのを期として、最も地の利を生かすことのできる東北出身の画家にスポットを当て、文献に残された伝記資料を網羅的に抽出し、画家ごとに集積したうえで、地域と階層に由来するアイデンティティの分析に着手しようと考えた。最終的に、その過程において作成する「伝記資料集成」については「東北編」として整理する一方、それに基づいて検証したアイデンティティの分析結果は「画家略伝」に集約して執筆、公表する。

２．研究の目的

本研究の目的は、基礎資料の集成を通じた江戸時代の東北画家における地域と階層に由来するアイデンティティの解明、およびその公表による近世絵画史・近世東北史への貢献である。

東北出身の画家に焦点を絞り、城下や宿場といった出身地域、武士や町人といった身分階層に由来するアイデンティティの解明を目指す。ここで用いる資料は、領主としての藩に伝来した関係文書、菩提寺に伝わった墓碑や文書、画家と交流のあった学者の漢詩文集や随筆という異なる性質を備えた 3 種を指す。現在、日本彫刻史の分野では、仏像に書された銘文を集成する基礎的研究が継続的になされているが、残念ながら研究代表者が専門とする絵画史においては、後世の礎となる長期的展望を有した基礎資料の集積、研究が行われているとはいえない状況にある。

特に近世絵画史に関する資料は膨大であり、そのひとつひとつに目を通して関連する記述を抽出し、地道に集積していかなければならない基礎的研究への着手には、それ相応の覚悟が必要となる。けれども、誰かがどこかの段階でやり遂げなければ、いつまで経っても発展的研究に踏み出す契機が生まれてこないことは明らかである。

研究代表者はこれまでの研究にともない、江戸時代の漢詩文集と随筆に関するデータベースを継続的に作成してきた。藩伝来文書や菩提寺関係資料など、地域に特化した限定的な資料調査に一歩が踏み出せるのは、以上の蓄積あってこその可能な手法である。さらに「伝記資料集成」を作成したうえで、地域や階層に由来するアイデンティティを解明し、画家ごとの「略伝」に集約して執筆、公表するという手法も、美術史研究においては初の試みとなる。

３．研究の方法

東北出身の画家について、環境に由来する感性や嗜好などのアイデンティティを解明するため、
(1)領主としての藩に伝来した関係文書
(2)菩提寺に伝わった墓碑や文書
(3)画家と交流のあった学者の漢詩文集や随筆
という異なる性質を有した江戸時代の資料を 3 本柱と位置づけ、網羅的な調査を行う。
そこから画家の伝記に関する記述を抽出する(STEP1)。
その結果を画家ごとに集積する(STEP2)。
性質の異なる資料であるゆえに、これまで以上にその活動を俯瞰的にとらえることができると考える。
さらに、地域や階層といった環境に由来する感性や嗜好の共通点を分析し、それぞれのアイデンティティを解明する(STEP3)。
最後に、基礎資料に基づいた解明結果を「画家略伝」に集約、執筆する(STEP4-1)。
また、この過程で作成した江戸時代中後期の画家に関する「伝記資料集成」についても、「東北編」として公表する(STEP4-2)。
その実現により、近世の絵画史および東北史においてさらなる発展的研究に踏み出す契機となることが期待できる。

４．研究成果

江戸時代における東北諸藩に所属もしくは領地に生まれた画家を 34 人取り上げ、その人となりや活躍を記した基礎となる文献を調査し、それぞれの城下町や宿場町といった「出身地域」と武士や町人などの「身分階層」の２つの環境要因により、どのような感性や嗜好が育まれ、作画活動に反映したのかを明らかにした。これらの画家は、おおむね絵画制作を本業として一定の扶持や所領を拝領して大名家に仕える「御用絵師」、藩に所属して俸禄を賜いながら職務を遂行し、一方で余技として絵筆をふるった「武士」、さらに藩領の城下町や宿場町で生まれて画家となった「町人絵師」の３つに大別できる。後者ほど活動領域における自由度が高くなるため、それが所属流派や絵画表現を左右する大きな要因となっていた。さらに「武士」の場合には、藩主との関係において活躍した人物が多かったため、藩主の交流や嗜好が作画活動や表現内容に影響を与えた。「町人絵師」の場合、特に出自となる家業が重要であり、旅籠屋や寺子屋、私塾などに生まれた画家は外部への関心が強く、早い段階で江戸や京都へ留学して大成する傾向があると判明した。

以上で取り上げた 34 名の画家の多くは東北の地方史のみで知られていたものの、実際は江戸や京都などとも深い結びつきを有し、ローカルに終始するものではないことを明らかにした。また、江戸時代の絵画史が多様性を有するものであったと示すため、画家の伝記や作画活動を伝える文献資料を『東北画人基礎資料集』という成果物に集約した。これを美術史研究者、大学図書館、東北地方の主な図書館に配布し、東北の画家に対する美術史研究の活性化、さらに各地域の文化財に対する認識の深まりを期した。結果として、各画家の菩提寺および子孫との交流が生まれ、いくつかの資料に関する情報が寄せられた。また、2022 年 3 月 12 日から 4 月 17 日まで板橋区立美術館で開催された「建部凌岱展」、同 4 月 4 日から 5 月 22 日まで早稲田大学会津八一記念博物館で開催された「お殿様と狩野派―秋田藩主佐竹氏と藩絵師狩野秀水家―展」とも内容が深く関係したため、配布した以外の研究者にも注目された。

一方、本研究に基づく『東北の画人たち』と銘打った美術展覧会を 2022 年 6 月 15 日から 8 月 31 日までに加え、2023 年春の２度にわたった松島の古刹・瑞巌寺の宝物館で行うこととなった。さらに研究成果を発表する場として、この期間中の 2022 年 7 月 31 日には講演会を開催する。研究代表者は「東北の画人たち―山形諸藩を中心に―」、調査に加わった福島県須賀川市文化振興課学芸員の大野真実氏は「広瀬蒙斎と白河藩の画人たち」、同じく新潟市美術館学芸員の菅沼楓氏は「秋田藩の御絵師たち」との内容をそれぞれ発表する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 杉本欣久	４．巻 -
２．論文標題 江戸時代における東北の「御用絵師」と「町人絵師」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『東北画人基礎資料集』	６．最初と最後の頁 3-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 杉本欣久	４．巻 271
２．論文標題 日本の文人画と勧戒(鑑戒)思想	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アジア遊学	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	大野　真実 (OONO MAMI)	福島県須賀川市・文化振興課・学芸員	
研究協力者	菅沼　楓 (SUGANUMA KAEDE)	新潟市美術館・学芸課・学芸員	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関